

私の幼児教育論 XV

神 沢 良 輔

三 保育の基本(十三)

——幼児とのかかわりあいの中で——

(XVI) 明るく、美しく安定した心で幼児に接する

ひとりひとりの幼児は保育者に愛情を受容してもらいたいという要求や、自分のもっている価値を認めてもらいたいという要求をもっている。それは、どのような場所においてもかわらない。

また、幼児はこのような要求を保育者が必ず受容してくれるものだと思っている。

だから保育者は、このような幼児の要求を常に満足させてあげられるように、明るく、美しく安定した心でひとりひとりの幼児に接することを心がけることがたいせつである。

とはいっても、保育者とても人間であり、いつも安定した状態

で保育に臨めるとは限らないし、気分が悪いときだってあるであらう。でも、つとめて明るく、美しく安定した心で幼児に接することのできるように努力すべきである。

いうまでもなく、保育者の感情の不安定さは幼児たちにもすぐ影響を与え、幼児たちの行動を不安定にってしまうだろうし、このような状態では、保育をするということ、そのこと自体が不可能になってしまうということにもなるだろう。

すくなくとも、明るく、美しく安定した心で幼児に接していることとする保育者の努力は、幼児が安定した姿で活動しているというところで、保育者としては最大の満足をうることができるだろうし、そういう努力によって、自己の感情を制御できたという自信は、幼児とのかかわりあいの中で、さらに自己の感情の安定を求めていくということになっていくのではないだろうか。

保育とは、このような幼児とのかかわりあいの中で、保育者自

身が自己をより高い水準へ変革していくことの努力の中にあるのではないかと思うのである。つまり、保育者が、自己を安定させていこうとする努力の中で、幼児も安定していくということになるといっても過言ではないだろう。そこに、幼児とかわわっている保育者の真の姿があるのではなからうか。

このようなひたむきな保育者の姿は、たとえ保育の過程の中でいろいろな失敗があったとしても、幼児にも美しいものとして受け入れられるだろうし、その中で、保育者も幼児とともに発達していくことになろう。

(XVII) 美しいみだしなみて幼児と接する

前述のような保育者の努力に対しては、幼児は美しいものを感じるであらうし、また、自分の担任の保育者は、美しくあってほしいと願っているであらう。

それは、保育者の年齢的に若いということや、いわゆるオンシャレであるということでは決してない。きちんとしたみだしなみ、人間的なやさしさ、幼児といっしょになって力いっぱい元気にとびまわれる健康さ、そういうパーソナリティのすべてに美しさを感じているということである。

だから保育者の服装についても、幼児は、非活動的なものや、どっちみち幼児といっしょにいれば汚されてしまうからという理由で、うすよれた作業衣のような服装や、暗い色のものについては、決して歓迎しないであらう。

「うちの先生、おしゃればかりしていて、ほくらとちっとも遊んでくれへん」とか、

「先生、ちょっとおしゃれた方がええわ」

とかいうようなことを、私も幼児同士が話し合っているのを聞いたこともある。

また爪を長くのばしたり、爪に濃厚な色のマニキュアを塗ったりして保育するということは、一方は幼児に危険を与えることにもなりかねないし、他方は、幼児に保育者とかかわりにおいて不自然さからくる不安感をもたせることになりかねないということになろう。

つまり、保育者は健康的な美しさが要求されるだろうし、それはそのクラスの雰囲気や幼児の活動にも微妙に反映していることは事実である。

このようにみてくると、保育者のみだしなみは、やはり、幼児とかかわりあいの中において占める位置は決して少なくないと思われるのである。

(XVIII) 保育者の手は、幼児とのかかわりあいのためにたいせつである

保育者の手をみてみると、なにか保育者の保育に対する構えがわかるように思う。ある保育者の手は、幼児たちがすがりついていたり、幼児のからだにふれていたり、また幼児のために用意してあげたものを運んだりというように、いつもふさがっていて、きわめて忙しそうである。

でも中には、手もちぶさたで、手をだらんとしていたり、坐っているときには、手をおごにあてたり、幼児の間を動くときにも、手をうしろに組んでゆっくりとコーナーを監視的にながめて歩いたりしている保育者をみかけることもある。このような保育者には不思議に幼児の方も無関心で、保育者に積極的に働きかけているという姿がみうけられない。

そのため、このような保育者の学級は、なんとなく活気がなく、幼児とのかかわりあいもうまくいっていない場合が多いし、保育者の態度も拒否的にみえる場合すらある。

やはり、保育者の手は、保育者の目と同様に、幼児とのかかわりあいの中で、もっともたいせつなものだということがいえる

し、そのためには、保育者の手は、幼児のどのような動きにも対処できる必要がある。もちろん、手の動きのひとつひとつを意識しては保育はできないであらう。でも、手をうしろに組んでは保育にならないことだけは事実である。

だから、「保育者の手は、幼児とのかかわりあいのためにたいせつである」ということを再確認しておくことは必要である。

* * * * *

“私の幼児教育論”というところで書き始めて、いつの間にか、二年が経過してしまった。そのことは、私が幼児との生活から離れて二年経過したということにもなる。私にとって、幼児とともになっていた思い出は、美しく楽しいものとして残しておきたいと願いながら、その時に感じていたことをまとめたのが本稿であり、それなりの意味があると思うのである。そのため、「幼児とのかかわりあいの中」にみられる「保育の基本」という現場の中心的な問題のいくつかをまずあげてみることにした。これはまた、私の保育実践における反省ということでもある。

いうまでもなく、ここにのべたこと以外にも、幼児教育にはまだ多くの問題が山積していよう。このことについても述べなければ

ばならないことは多いが、「保育の基本」についての一応のまとめりができたようにも思われるので、このあたりで、「私の幼児教育論」をひとまず終ることにしたい。

なお、参考までに、「保育の基本」について、これまでのべてきた項目についてあげてみると以下のようである。

- (1) 幼児とともに生活する。
- (2) 幼児の一日の生活は朝の一瞬できまる。
- (3) 幼児の目の高さで接する。
- (4) 幼児の行動の是認・否認は、まず保育者の目（視線）で。
- (5) ひとりひとりの幼児のことばの中にある感情を受容する。
- (6) ひとりひとりの幼児は、いつも保育者と話し合っていると思っていることを理解する。
- (7) 必要なときに必要なところに動けるよう、余裕をもって幼児の活動をみつめる。
- (8) 幼児を集合させるときは、保育者が先にその場所に行く。
- (9) 必要なときには十分な指示をする。
- (10) 保育者はすべての幼児たちの活動のみられる位置にいる。
- (11) 幼児が「そそう」したときこそ、幼児とのかかわりをもつチャンスである。

(12) 幼児のひとつひとつの行動には、それぞれの意味があることを理解する。

(13) 幼児のせいにして、自分の保育の自己満足をしなない。

(14) 幼児を先入観をもってみない。

(15) ひとりひとりの幼児が保育の内容を選択できるようにしてあげる。

(16) 明るく、美しく安定した心で幼児に接する。

(17) 美しいみだしなみで幼児に接する。

(18) 保育者の手は、幼児とのかかわりあいのためにたいせつである。

（暁学園短期大学）

